

後産停滞の対処方法 試される後産の処置

なかなか落ちない後産は「自然に落ちるまで放置」、「引っ張って落とした方が良い」というように異なる意見を耳にします。今回は、どちらの対処方法が良いのかについて、白糠町4Hクラブ（以下、白糠4HC）がプロジェクト活動で調査した結果をご紹介します。

1 後産停滞とは

後産停滞の定義は、文献によって様々ですが、「12時間以内に後産が出ない状態」を言います。後産停滞した牛の多くは、子宮内膜炎を併発し、受胎率の低下などを招いてしまう可能性もあります（写真1）。

そのため、乾乳牛の栄養や分娩環境に注意し、まずは後産停滞にさせないことが大切です。それでも後産停滞の牛を発見した際は、後産の処置が必要です。



写真1 後産停滞は子宮内膜炎を招く可能性がある

2 調査方法

クラブ員6名が行った調査方法は、分娩後の牛の状況を記録し、「後産を手で引っ張って取れそうだったら引っ張った牛」と「そのまま様子をみた牛」の初回授精日数と空胎日数を比較しました。後産を引っ張る力加減は、重さにすると1〜2kg（500mlペットボトル2・3本分）ほどです（写真2）。

3 調査結果と考察



写真2 後産は無理に引っ張らない

後産停滞が発生した3農場の記録を集計しました。その結果、「後産を手で引っ張った牛」の方が、初回授精日数、空胎日数ともに短くなりました（表1）。さらに、これらの繁殖成績が良くなる分、治療費も減少することがわかりました。

表1 後産の処置別における集計結果

	引っ張る	放置
初回授精日数	78	87
空胎日数	115	143
治療費(円/頭)	28,943	35,331

※A農場の各10頭の平均値を比較

治療費はNOSAIカルテより

繁殖成績が良く、治療費も低減!!

結果から、後産を手で引っ張って落とした方が、子宮の回復が早く、初回授精も早まり、最終的には空胎日数も短くなったと考えられました。

ただし、子宮を傷つけてしまう可能性があるため、無理やり引っ張ってはいけません。また、後産停滞した牛が発熱、食欲不振を呈している場合は、一度獣医師に見てもらいましょう。

4 後産停滞の原因を調査

特に後産停滞の多かったA農場と少なかったB農場を比べてみると、乾乳牛の飼養環境に違いがありました。

A農場は、1頭当たりの飼養面積が6.1㎡だったのに対し、B農場は51㎡と、飼養面積に余裕がありました（表2）。このことから、後産停滞の原因の一つは、過密によるストレスだと考えられました。

5 最後に（4HC員より）

白糠4HCは今回の調査結果を全道青年農業者会議で発表し、優秀賞を受賞しました（写真3）。今後は、後産停滞が発生しなかった農場において、その要因を調査する予定です。この他にも、初産分娩月齢の短縮に向けた活動も行っています。

これからも白糠4HCは、積極的に活動していきます！

表2 農場別の飼養面積

	A農場	B農場
飼養面積(㎡)	183	510
飼養頭数(頭)	30	10
1頭あたり面積(㎡/頭)	6.1	51.0
推奨面積(㎡/頭)	9.0~10.0	

1頭あたり飼養面積が狭い!!



写真3 全道青年農業者会議にて優秀賞を受賞しました！

（平成三十二年二月作成）